
シュウ・シラカワ、外史に降り立つ

S

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シユウ・シラカワ、外史に降り立つ

【NNコード】

N64390

【作者名】

S

【あらすじ】

真・ナグツアート撃破から一年後のシユウが、外史の管理者からの依頼を受けて様々な世界へ降り立つお話です。最初の世界は…真・恋姫十無双！！

プロローグ

「マサキ達と共に真・ナグツアートを退けて一年…シユウは様々な文献を漁つていた

（…やはりヴォルクルスそのものを消滅させない限り私の枷は外れませんか…）

デスクに最後の一冊を置き、シユウはそのまま目を閉じる

（しかしヴォルクルスの本体を復活させてこの世に現界させるには九大司祭全員の力が必要ですし、私もその役職に戻らねばなりません。）

それでは私の意識はまた…）

そんな事を考えていると…シユウはいつの間にか眠つてしまつた。

（む…？）（は…夢…？）

暗闇の中でシユウは一人立つていた。意識は随分とハッキリしているが…他に何が見えるわけでもない。

（夢にしては感覚がハッキリしすぎていますね、しかしこれは一体

…)

「あーひー……」めんこなさこねこきなつこなとこに呼び出しがやつて

シユウは後ろからの声に反応すると、ドーン

ボーティビルダーみたいなふんどし一丁の男が立っていた

「…貴方が私の意識を呼び出したと？」

「ええわいよお…ちよつと色男な貴方に頼みたい事があつてね」

体をくねらせバチン とワインクしてくるボーティビルダー。

だがシユウはそれに動じることもなく相手を警戒しながら話を進める

「…まあほのか話を伺いましょうか」

「あらあらそんなに警戒しなくていいじゃあ单刀直入に言つわ。あなたにとある世界に行つて貰いたいの」

「世界…平行世界に行けど?」

「そつちじやないわね、あなたのいる世界とは全く違う世界よ。そこであなたに生きて欲しいの。報酬は…」

男はウインクしながら言った

「貴方の枷を無効化するための情報よ」

「…ヴォルクルスの本体を倒す以外の方法で枷を無効化できると言うのですね?」

「ええそうよ。ワタシはその無効化する力となる存在を別の世界で見つけたわ。もし貴方が私の条件を呑んでくれるなら、貴方が帰つてきたときにその世界へ貴方を送つてあげる。」

嘘を言つているように見えない。ヴォルクルスの存在を知つて私の意識を自らの空間に呼び寄せることができる存在。かけてみる価値はありますね…

「私はその世界に何年いればいいのですか?あまり長い間そんな世界で人生の時間を取られたくは無いのですが…」

「大丈夫よ、貴方の本体はここで眠り続けるだけ。意識が肉体を伴つて異世界に現存するから貴方の寿命とかにはほとんど影響ないわ。もし死んでもここに意識が戻るだけよ」

「ですが貴方の望む結果が得られなければ…私は情報を提供しては頂けないのでしょう?」

シュウはボディビルダーを見てフツと笑つた。

「その世界で何をすればいいのかも聞かされずにただ生きろ…ですか。」

シュウは顔を上げてボディビルダーを見る

「いいでしょ…現時点のこちらの世界ではもうヴォルクルスの本

体を復活させるしか方法が無い……」の依頼…達成して差し上げます

よ

「話が早くて助かるわ じゃあ早速と言いたい所だけ約束して欲しいことがあるの」

「なんでもしよう~」

「貴方は魔術を使っては駄目よ。向こうの世界に【氣】は存在するけど【魔術】は存在しないの。だから一切の魔術使用は禁止…ただし、相手が明らかに魔術を使って来た場合は許可するわ。」

「フッ…平和な世界」とよされるわけでは無いことは理解しましたよ。わかりました、約束しましょ~」

「お願いね 私の名前はチョウ蝉よ また会いましょう」

(ー?)

ショウの視界が一気に明るくなり…そのまま意識を失った。

Hン冷との出会い

「…シッ…」
「…」

シユウの視界に見慣れぬ天井が入る

(…外史の世界とやらに来たのでしじょうか?)

シユウは脇に置かれた椅子に自分の衣類が置まれているのを見た。すぐに確認するが衣服やアクセサリーなどは無くなつてはいないうだ。

今はパジャマのようなものを着ていた。

「失礼? 田は覚めたかしら?」

突如扉から女の声がする

「ええ… 貴女が私をここに?」

「まあ運んだのは私の配下ですけど… とにかく入つてもよろしいか
しら?」

「…しばし待つて頂けませんか? 着替えだけさせて下さい」

「わかりましたわ」

シユウは自分の衣類を身につけると扉を開けた

そこには…金髪の髪を腰までストレートに伸ばした美女が立っていた。

年の頃は三十前後だらうか…ビートルの中国を思わせるトザインの赤の衣服に身を包み、下は膝上程度までのスカートを身につけている。

ビートルなぐ氣品を感じじる美女をシユウは一つしかない椅子をベットの前へやり美女に進めて、自分はベットの端に座つた。

「ふふ、初対面の見ず知らずの女なのにちやんと扱ってくれるのね？」

「最初の質問の答えからして貴女は命の恩人なのかも知れませんからね。」

女は柔らかい笑みを浮かべて首を振つた

「確かに荒野に倒れてた貴方をここまで運んだのは私達だけど、それは貴方の体を気遣うのと同時にこの国の民のためにしたことよ。」

そして彼女は真つ直ぐショウを見つめると

「私の名はエン伶。字は公初。この洛陽にて帝に使える大尉よ…貴方は？」

「姓は白河、名は愁と言います。字はこの國の人間では無いのであります。」

その答えに満足したように軽くまた笑みを浮かべながら頷くエン令

「結構よ白河愁、では幾つか質問をさせて貰うわね？まあ……この国の人間では無いのならどこから来たのかしら？」

シユウは少し難しい顔をした。言つても理解されないだろ？から

「……さて、なんと言えばいいのでしょうか。別の国とも違う世界だと云つて起きましょ。」

「ふうん…なるほどね。つまり貴方はここから私達中国人が現在の文明行けるような場所からは来ていない…ということね？」

シユウは正直驚いた。田の前の女性の聰明さである。一つの質問で幾つも答えを得てゆく彼女に興味が湧いた。

「ええその通りですエン令殿。貴女は聰明な方のようですね…。」

「あいがとう白河愁さん…うへん長い名前ね？少し摘んでもいいかしら？」

「では愁と」

「では愁さん、愁さんは何か目的があつてこの洛陽へ？」

「いえ、確かに私には目的がありますが、それはこの世界で成し得る事ではありません。ただこの世界に来たのは偶然ではありませんが」

エン伶は少し考へると

「つまり愁さんの目的を達成する途上で、Jの国に来なければならなかつた……」

「ええ、ただこの世界で私が何をするかなどは何も決めてはいませんがね」

（なるほどね、彼は恐らく第三者からの依頼でここに来た、だけど何をすればいいのかは聞かされていない。）

「…わかりましたわ。では一つ約束して下さご。Jの洛陽において領民に害をなすことはしないこと。」

「それだけでいいのですか？」

「構いませんわ。後は愁さんの好きなようにして頂ければ。といふで…」

エン伶は屈託の無い笑顔を向けていつ言った

「私のところで少し働いてみません？愁さんお金も持つてなさそうですし、私のところで働いてくれるのであれば、お給金が出るまでの間の食事、家、雜費なんかは私が用意致しますわ」

「Jの顔のエン伶。年の割に凄く無邪気な顔をするものだとシューは思った

「フツ…私を手元に置いておいた方が安心というわけですね。それに私にしてみればお金を合法的に貰えるのは好都合。ですが一つ言

つておかなければなりません」

「何かしら?」

「私の世界の知識をこちらで披露する気はありません。私のいた世界では貴女達とは文明の発達が余りにも違いますからね。」

エン伶はニコニコ顔を崩さず頷いた

「一部の人間の才に頼つた国なんてすぐに滅びるわ。それに愁さんの知識をいきなり披露したらそれこそ世は乱れそうですし…うふふ、心配しないでいいわ」

「ならば私はしばらくエン伶様の所でお世話になります。ですがあくまで一時的なことであるのを忘れないで下さいね。」

「ええ、よくつてよ 後、愁さんは私の密将として働いてる時間は私と行動を共にしてもらいます。」

「密将ですか?」

「ええ、私直属の部下ではないのですから様づけもいりません。それに戦闘にも貴方が行きたいというまで連れては行けません。普段はこの世界の事を文献や民と触れ合いながら知つてもらい、大体解つたら私の補佐役をして頂くわ」

「補佐役…こんな見ず知らずの得体の知れない男を?」

「だつて優秀そうだし」

「はあ……」

「愁さんは知らないでしようけど、私のエヌ家は四世三公を派出してゐる名門なの。だから代々使えてくれる家臣がいるわけなんだけど……」

エン伶はため息をついて

「私が生まれる以前からの配下の家同士の派閥があつてね……それに何代も続いてるせいで実力より家柄主義なのよ。儒教の影響かしら……」

またため息をつくエン伶。

シユウは黙つて話を聞いている

「私もそんな名門に生まれて厳しい教育を受け、元服してすぐお仕事をづけの毎日で……優秀な人材を探す暇もなかつたのよね。一応南皮の太守っていう地方の纏め役みたいなのに任命されてるんだけど洛阳から離れることも滅多になくてね……」

(これは……しばらく話を聞かないといけないみたいですね)

二時間ほどエン伶の愚痴は続いたのだった。

売春宿の少女（前書き）

文才なれどさきて泣けてきます。

後、シユウが少し優しそうかるかな…まあ敵には容赦無くすればいいのかな…

グダグダですがどうぞ。

売春宿の少女

s i d e シュウ

エン伶の元に来て早くも一月が経過した

この国の基本的な知識を大体収めた私は一週間ほど前からエン伶の補佐役として宮中に出入りするようになつた。

大將軍何進、十讓侍の張讓など現在の政治の中心人物とも顔を合わ
せている

しかし大將軍は元肉屋で戦争知識も口クにない。

十讓侍は政務など知らずに民から汲み上げた血税を自分達の所に回
るようになるとしか考えない小悪党

以上が私の見解です。

エン伶も大尉という役職についているが実權は何進にあり、戦に置
いてはエン伶が何進を補佐する形になるといふ。

さてあの肉屋がエン伶の進言を聞き入れるかは、はなはだ疑問です
がね。

さて今日はエン伶の補佐についてから初の休日です。

エン伶は仕事が新たに入つたらしく私の事は気にせず休日を楽しん
でと言って宮中に向かつた。

私は洛陽の街へ繰り出した。

確かに栄えてはいるが貧富の差が激しいですね。

着ているものが立派な人達が街の中央を

みずぼらしい身なりの人達は脇を歩き、路地裏に消えてゆく。

貧富の差は仕方のないことですが、上に立つものがしつかり政治をしていれば多少なりとも改善できそうなものです。

まあ彼らは権力の亡者…期待するだけ無駄ですがね。

さて、この世界で私が何をすればいいのかはわかりませんが、あのチョウ蝉という男の雰囲気から察するに悪い事をしろと言つ風には見えません。

こんな時代に送られたのならば恐らくは

乱れた世を正し、この国に平和をもたらせということでしょうか。

それを達成するにはまず方法を考えなくてはいけません。

まず第一の案としてはエングリッシュに協力するのが一番無難でしょうか。

聰明でカリスマがあり上に立つ者としては申し分ない素質があります。ビアン博士の時と同様とまでは言いませんが、彼女なら私は力

を貸してもいいでしょう。

ただ彼女の陣営は話を聞くとかなり派閥が入り乱れており、私がそこに入るとなると… 家臣の意識改革が必要になりますね。大肅正も考えなければなりません。

まあこれは洛陽にいる一部のエン令配下だけでは何も出来ません。実際に南皮にいる配下達を見てみないと何もわかりませんね。

第一の案は私自らが台頭するというものの

ですがこれは今の時点では難しい。漢という国が微弱でも機能している以上、大義名分がなければ旗揚げしてもただの賊。

それに國を率いるなど王位継承権を放棄した私には…ね。

やはりエン令の補佐を勤め続けるのが妥当なのでしょうか。

シユウは適当に歩いているとそこには歡樂街だった。

ほう…やはりこのような時代にもこういう店はあるのですね。チラリと何件もある店の方に目をやる。

む…？

そこにはガラの悪い男に絡まれている女の子がいた。

少し様子を伺つてみる。

「おいおい嬢ちゃん！！なんで喋らないんだよ？なあ？嬢ちゃんが袖を引っ張ってきたんだらうが？」

「あつ…………」「

「あっだけじゃわかんねえだらうが？ なあ、エリのエリ、こいつ店なのか聞いてんだよ、ちやんと答えるよー。」

「わ
.....
わた
」

「あ、たく意味わかんねえーー帰らせて貰うぜ」

「あつ」

男は女の子の前から立ち去つた。

まああれでは仕方ないですね。

綺麗な黒髪をポニーテールにして可愛らしい女の子なのですが…

女の子はシユンとした様子で自分の店の前と思われる場所に戻った。

チラつと匂ひ田をやる。

「いや、下は飲み屋で、一階が売春宿になつてござりました。」

飲み屋で氣に入つた娘を上で抱けるシステムなのだろう。

しかしあれでは指名も来ないのではないだろうか。エン伶に聞いた話ではお金の為に人身売買されるよりはこうこう店で働いた方が安全は保証されていると聞きました。

彼女も家族の為などの理由での店にいるのでしょうか…

そんなことを考えて「こ」と彼女は「ちらにやつてきた。

「あつ…………あつ…………」

彼女は必死に何かを喋らうとしているが、声が止まってしまいます。

彼女は私の顔を見ると…私の手を取り指をなぞりはじめた。

これは…文字ですね。

私のお店で飲んでいってくれませんか？

とこう訳でいいでしょう。

しかし…読み書きができる娘が何故このような場所で…

少し興味が沸いた私は

「いいでじょ、ただしお酒と食事だけですよ?」

彼女はパアッと顔を輝かせてこひらひで何度も頭を下げると軽く手を取り店に案内してくれた。

お店に入りテーブルに座ると彼女が隣にかけてくる。

店のメニューで中間程度のお酒を頼む。

「貴女は飲めるのですか?」

すると彼女はまたこひらの手をとつ

(はい、でもお酒少し弱いです。)

と、伝えてきた。

「ではお茶でも頼みましょうか。」

シユウはやや高級なお茶を彼女に入れた。

彼女はまたシユウの手を取ると

(あつがとうござります、わたしはトウガイと申します。今日は宜しくお願ひします。)

と伝えてきた

「トウガイさんですね、私は愁と覚えて下さい」

「いやかに頷くトウガイ。すぐに先ほど頼んだお酒とお茶が運ばれてくる

「では…一人の出会いに乾杯と行きましょう」

トウガイは「ククク頷いて陶器を合わせた。

「トウガイさんは何故ここで働いているのですか?」

(恥ずかしながらお金の為です。病弱な母と幼い妹を養わなくてはいけないので、当時13才だった私にはこれくらいしか…)

12を超える一応大人として見られることもあるこの国で、女の子一人で稼ぐにはやはり体を使つしか無いといつよつ話をした。

ちなみに一度彼女を抱いた人が、また来てくれるためそこそこ稼げているらしい。

(私はこんな感じでまともに人とお話する事が出来ません。一応読み書きは出来るのですが、なかなか完全にこちらの意志を伝えるのは…)

「仕方ないでしょ、普通の人達は普段食べる物や売買する物の漢字程度しか覚えませんからね。教育を受けていないのですから」

(はい、だから接客も難しくて、先程伝えましたように二階で稼い

でるんです。あつ、「めんなさい」愁様のお相手をしてるの」「こんな話を（

「いえ、構いませんよ。一応今、私は大尉殿の元で働いています。」「ひして様々な民の生活などを聞くのはとても為になりますからね」

（お役人様だったのですか！？）「めんなさいこんなお店に連れ込んでしまって…お役人様ならきっとけやんとしたお店に行けるのに（元に

「そんなところで飲んでも民の生活を知ることは出来ませんよ。気にして下さい」

（はい…）

その後、愁はトウガイから様々な事を聞いた。治安、生活、民の国に対する不満、更にトウガイ自身の事。元を辿れば代々國に仕えてきた家の生まれで幼い頃は文武を叩き込まれていたらしい。

だが父が流行り病で亡くなり、親戚もほとんどが亡くなってしまう。

また、父は小隊長より出世が出来ず、余り貯金をする人間でもなかつたので家は貧しかったらしい。

だからトウガイは暮らしのために、父の知り合いの紹介を得てここで働くかせてもらっているとのことだった。

（今でも1日に少しだけ武芸の鍛錬を一人でしてるんですよ。この仕事で太るわけにはいかないので体型を維持するのもいいんです）

「そうですか…、確かにトウガイさんは健康的な美しさがあります。
その黒髪と相まってとても魅力的ですよ」
するとトウガイはちよつと赤くなつた後に

(ありがとうござります愁様、愁様もとても魅力的なお方です)

と伝えてきた。

そしてじぱいへして愁は店を出る。

「トウガイ、今日は有意義な時間を過ごしました。また機会があれば寄りさせて貰いますよ。」

(はい、ありがとうございます。こんな私でなければお待ちしてあります)

最後に少しだけ愁に胸に顔を埋めて彼女は店に戻つていった。

(フッ…たまにはいいの悪くないです)

しかし彼女程に読み書きが出来、正しく相手に言葉を伝えられる能力があれば、文官や書記官として働くと悪いのですが…

少なくともあの書記官ならばあの店で働くよつ稼げるのではないでしょつか?

少し気にかけて見ますか…

ショウはそんな事を考えながら家路についた。

真名（前書き）

誰か文才を下さい。... orz

相変わらずグダグダですがどうぞ。

真名

私がトウガイと会った次の日、エン伶の執務室でトウガイの話をしていた。

「文富もしくは書記富ね…うーん…愁が言うのだからきっと優秀な人材に育つてくれそうなのだけど…」

エン伶は珍しく難しい顔をしている

「やはり…身分ですか」

シユウの質問に頷くエン伶

「ええ…この洛陽において体を売つていた人を召し抱えるのはちょっと厳しいわね。私の領地であれば問題は無いのだけれど…」

まあわかつてはいたことです。エン伶がトウガイを欲しがっているのが垣間見えただけでもよしとしましょ。

「…そうですか。まあ本人の意志確認も取つていませんし、頭の片隅に置いといて頂ければ」

エン伶は笑みを浮かべて頷いた

「わかったわ。貴方が私の元にいて部下を持つ立場になつたら考えましよう。私の元から離れないのならいつまでも私の補佐役に留め

ておくれつもりもないですか？」

「それで構いませんよ。さて、今日はエンへの街道にあらわれた賊の討伐準備でしたね」

エン伶はまた難しい顔をする

「そうよ。全く都近くに賊が出てしまって世も末ね……大尉を勤める私がいうことじやないんだけ……はあ……」

「軍權を持つてるのは何進です。彼は何故今回も出陣しないのですか？」

「賊如きに大將軍様が出るまでもないって事でしょ。私も大尉なのに……大体時代が時代なら大將軍なんて役職は……ブツブツ……」

また何か一人で言い始めてしました。最近の何進の態度が相当気に入らないみたいですね。

「はあ、まあいいわ。今回の賊討伐だけど愁はどうするの？ついでくるかしら？」

「総大将が貴女ならついて行きましょう。私はこの世界の戦いに関しては素人ですからね……学ばせて頂きますよ。」

「わかったわ、愁は本陣で私の指揮を見ていてね。多分今回の戦いで本陣から戦うこととは無いとは思うけど……」

エン伶は真剣な顔でこちらを見た

「愁は…人を殺したことはあるの？」

私は少し自重気味な笑みを浮かべた

「ええありますよ。血らの剣で人を殺したこともありますし…心配はいりません」

「…そう、わかつたわ ところで愁の武具は…つと」

エン伶は立ち上がり部屋の隅にあつた大きな袋から数本の剣を取り出した。

「前に聞いた話だと、剣術に多少心得があるって聞いたから選んでみたわ」

そういうて机に並べられた数本の剣。

「実際に使つて見てもいいわよ? お相手は私が勧めさせて頂きますから」

「エン伶…実際の剣を使うのですよ? それに私は確かに剣帝と呼ばれた人物から指南を受けた身ですが、それも7年前の事。貴女に怪我をさせてしまつたら立つ瀬がありません」

ちなみに剣帝とは剣皇ゼオルートの父の異名だ。私はゼオルートから指南を受けたことはありませんからね。

「大丈夫大丈夫 サあ庭に行きましょう？ああ楽しみだわ」

「エン伶… 戦の準備を先に済ませなくていいのですか？」

「大丈夫よ 審配にまかせるわ。彼なら安心して任せられるから」

「やれやれ… 審配殿も苦労されますね」

審配とはエン伶に仕える武官である。

知略を得意とした後方から部隊を動かすことに長けた軍師的な側面を持った人物で、年は35才。洛陽においてエン伶が絶大な信頼を寄せる数少ない人だ。

さて、私達は庭に移動し、私は剣を見る。

私はグラントワームソードを模した大剣を持っていますが、あれは一応魔力剣の部類に入るので、NGでしょう。

亞空間から武器を取り出さなくてはいけませんしね。

それにグラントワームソードに使用しているのは素粒子の段階で鍛えたチタニウムです。とても軽く、それでいて強度は最高。そんな素材を使っていたから大剣を振るえたので今回は普通の剣を選びました。

「それでいいのね？」

「ええ、では…参りましょ…うか」

エン伶の雰囲気が変わる。

冷たい風を纏つたような殺氣。

目の前の彼女がとても大きな存在に感じます。

ですが…

「フッ…」

私は地を蹴る。

そんな気配に気後れはしません。実際に戦つてみなければ相手の力などわからないのですからね

まずは小手調べといきましょうか

私は剣を上段から一気に振り下ろす。

スッ…

残像でも残すように紙一重で交わす彼女

私は剣を振り下ろした体勢のままです

そして彼女の腕が動く

「ハツー！」

「ー？」

私は彼女の腕が動くのを確認して、剣を一気に下から振り上げるギンッ！

彼女が片手で持っていたはずの剣にはいつの間にか両手がしつかりと握られていた。

そして飛び退きながら剣を受け止めて着地した。

「…まさか初見でこれを見防がれるとは…お見事です、エン伶」

「…今度はこちから行くわ

ドンー！

そんな効果音が聞こえそうなほど凄まじいスピードで一瞬で間合いをつめて来た彼女は剣を乱舞の様に振るう

私はその乱舞の起動に剣を添えて対応していく…が

(クッ…反撃の糸口が見えないだけでなく腕が…)

彼女の軽そうに見える一撃を受けることに腕が悲鳴を上げる…そし

て…

ガキン…!

私の剣は宙に舞つた…

しかし…私はエン伶の視界にはいません。

「…?」

エン伶はすぐにバックステップをする

ゴオツ…!

そのエン伶がいた場所に私の足元から伸び上がる蹴りが空を切つた…

「…私の負けですエン伶。付け焼き刃の作戦では貴女には勝てませんか」

「ふふ…」

エン伶は笑みを浮かべながら私に近づいてきて…

ドサッ…

私は彼女に押し倒された

「エン伶…？」

そう呼びかけると彼女は首を振った

「麗華」

「は？」

彼女はフウ…と、ため息をついてもう一度言つた。

「麗華…私の真名」

「真名？…私に真名を？」

「ええ…一族以外に真名わ預けるのは初めてよ…」

真名…自らが認めた相手以外に呼ぶことは許されない神聖な名前。

例え知つていとも認められた相手以外は口にしたら殺されても文句は言えない名前…それが真名だと聞いている

「何故…急に？」

「貴方が最高だから…じゃ駄目かしら？」

「…？」

「だつて…とても殿方とは思えないわ。この世界の男はみな普通の女より遙かに強いとは言え…基本的には才能あるものは皆女。」

ふふっと笑う麗華

「それなのに貴方は私をここまで認めさせたわ。普段の補佐役としての的確な意見。今の戦いで見せたような奇をてらった攻撃。そして私の気に動じない強い心…」

そして見る笑顔

「貴方の世界では男と女の差がどうなのか知らないけれど、私の世界で貴方みたいな男が目の前にいて…心が惹かれない方がおかしいわよ」

「…麗…華…」

「ふふ…こんなオバサンの真名をむりうつてくれてありがとう。これからも麗華って呼んでね 愁 」

チユツ

私は麗華から軽く頬にキスされる。

麗華は私から立ち上がり手を差し伸べた

「貴方は最初に私の所にいるのは一時的なものだと言つていたけど
…まだ、私を支えてくれる？」

慈愛に満ちた笑顔。

マサキが年上のウェンディに惹かれるのも少しだけわかる気がしますね。

「ええ…麗華がこの国に平和をもたらすその日まで、私は麗華の元で、この世界を生きましょっ…」

そうして私は差し伸べられた麗華の手を取った…

南皮へ（前書き）

大分お待たせしたのにこの読みにくい文章…自分には向いてないのかも（汗）

南皮へ

あれから一月がすぎた。

賊の討伐は相手が弱すぎて得るもののがなかつたため、私は麗華から麗華の注釈つきの兵法書を借りて、それを収めていった。

そんなある日の事

「愁、あなたにお願いがあるの

「なんですか？」

麗華はいつになく真面目な顔をして言った。

「洛陽から離れて南皮に行つて欲しいの」

「Hン家の本拠地へ？」

「ええ…もうすぐ世はこれまでに無いくらい乱れるでしょう。私も手は尽くしてるけど、靈帝、十穂侍、何進…自らの欲しか満たさない彼らがいる限りもう時間の問題なの」

麗華は深く溜め息をつく

「時代は群雄割拠の時代に恐らく突入するわ、そうなれば南皮の戦力が私の主戦力になります…でも…」

麗華はお茶を一口飲む

「南皮は私の兄が私の代理として太守を勤めているのだけど…兄は凡庸な人なの。そして兄は娘達…エン紹、エン術を溺愛して甘やかして育てているわ。恐らく世間のことなど何も知らないでしょ？」

麗華はまた溜め息をつく。

「群雄割拠の時代に突入して万が一私に何かあつた場合…私の後を継ぐのはエン紹かエン術になるわ。その時彼女達が今の調子じゃ困るのよ。それに私や愁だけがエン家の大軍団を指揮するのは将来的に無理があるわ。エン紹やエン術にも一軍を率いて貰わないと多方面作戦も展開出来ないわ」

そして麗華は私の前に腰に差していた剣を置く

「…」の剣は代々エン家の当主が持つ宝剣よ。これを愁に預けます。エン紹やエン術に世間の厳しさを教えてあげて…手段は問いません。

「

「…やれやれ、やつかいな頼みごとですね」

「エン家に仕える人間にエン紹やエン術に物を言う人材などいないわ。それに私や兄くらいしか彼女達は言つことを聞かないでしょ。でも愁なら権力に屈することなく彼女達を指導できるでしょ？」

「フッ…何を根拠にそんなことを言つているのかわかりませんが…まあいいでしょ。南皮の本隊を上手く使えなければ、群雄割拠の時代到来の好機を逃してしまってしそうしね」

「ええ…この任務にエン家の未来が…この国の未来がかかっている

の。お願いね、愁

「わかりました、少々荒療治になるかも知れませんが手を尽くします
しょう。ところで麗華、南皮へは直ぐに立たねばなりませんか？」

「出来れば早く行つて欲しいけど……どうしたの？」

「出来ればトウガイを南皮に連れて行きたいのです、もし彼女が工
ン家に仕える氣があるならば、今のうちから私の懐刀として育てて
おきたいのです」

「例の彼女ね。わかつたわ、出立は一週間待ちましょう。その間に
彼女を説得して下さい」

「ええ、そうしましょう」

そしてその夜、私はトウガイに会いに店に足を運んだ。

私は仕官の話を持ち出しました。

「トウガイ……貴女にお願いがあります」

「な……な……なん……で……しょう……？」

トウガイは私に慣れて来たのか、私には少しだけ言葉を発してくれ
るようになりました。

「え……？」
「貴女をまずは私の書記官としてエン令軍に迎え、南皮の地へ共に行つて頂きたいのです。一生懸命喋りつけてくれるトウガイに会わせて私は話しを続けます

「貴女をまずは私の書記官としてエン令軍に迎え、南皮の地へ共に行つて頂きたいのです」

「私は貴女の文才を高く評価しています。洛陽にいるエン令軍の誰よりも貴女の書く文字は綺麗です。そして文章を相手に上手く伝える才能があるように感じます。」

「そ…………そ…………な…………！」…………と

「謙遜する必要はありません。私が比較したのですからね……。それにトウガイ、貴女は元々武家の出です。いつこつたお店で働くよりも国で働く方が望みではありませんか？」

「そ…………れ…………は…………」

「今でも訓練は欠かさずしてこるのでしょ……貴女の武や知次第では書記官では無く私の副官にしてやくゆくはエン家の将軍職につくことも可能です」

「……」

トウガイは私の手をとつ文字を書き始めた

（確かに魅力的なお話です。愁様が私を必要としてくれてる事もとても嬉しいです……でも……）

トウガイは私を見上げる

（私は母や妹を養わなくてはいけません。家の事や母の看病なども私がやらないといけないんです……だから……）

「トウガイ、それについては心配には及びません。既にエン怜から家族や貴女がエン家の城に家族と共に住む事や、貴女が職務についてる間の世話役、万が一貴女に何かあった場合もエン怜軍が貴女の家族を必ず守る事など全て許可は頂いています。…後は貴女次第です、トウガイ」

トウガイは視線を下に落として考えこんでいる…無理も無い。喋れないとトウガイが名門エン家から仕官の話しがくるなど想像もしていなかつたはず。

ですが武家の生まれであるトウガイはやはり国に仕えるのは憧れであり夢だと以前聞いていました。

その機会が今、ここにある。

（家族と…相談してみます）

文字を書き終えたトウガイが強い力を持つた眼差しを向けてくる。

とても普段は娼婦をしていろとは思えない。

「わかりました…決意が固まつたら私を城まで訪ねて来なさい」

彼女に通行許可証となる木札を手渡す

まあ実際には通行許可証を見せると初めて私の所まで彼女が訪ねて來たといつ情報が回つてくる仕組みなのですが。

彼女は木札を受け取ると…ペコっと頭を下げて店の奥に消えていった。

さて、あれから4日…彼女はどいつもこいつもどうかね。

「愁様、宜しいですか？」

執務室の外から兵士に呼びかけられました

「どうしました？」

「ハツ、トウガイと名乗る娘がこのけの許可証を持って参りました。どこかにお通しますか？」

来ましたね…

「ええ、執務室に通して貰つて構いません」

「ハツ…」

しばりくじ

「愁様、御客人をお連れ致しましたー！」

「！」苦労でした、あなたは下がつて下さー」

「ハツーー！」

そして執務室の扉が開く。

「…ほり」

そこには紫を基本とした衣服を纏い、更に紫に近い黒の鎧をつけたトウガイがいた。

流石に武器は携帯していなこよつですが…

「よく来てくれましたトウガイ。ここに来たところとは、私達に力を貸して頂けるのですね？」

「は……いーー！」

トウガイは入り口付近から私の正面に立つと膝をついて頭を下げた

「わ……わたし……は……し……愁様に……お仕え……い……致し……ます」

「ありがとうございます、これから宜しくお願ひしますよ」

そして私はトウガイを私の前まで呼んだ

「その格好で来たところでは…武官としても役に立ちたいといふことですね？」

トウガイは口クツと頷いた

（知つての通り私は元々武門の生まれです、幼い頃から鍛錬をして参りました…確かに娼婦として働いていた間は満足に修行できているとは言えません。ですが、長刀の扱いには自信があります。兵法も必死に収めて参りました。勿論愁様の補佐として文官の役目も出来る限り果たすつもりです。ですから愁様…私を…武官としての私を試して下さい）

「いいでしょ、まずは武力を試させて貰いましょう」

「ハッ…！」

私とトウガイは中庭に出た。

私は剣を構える

彼女も先程は兵に預けていた長刀をやや下段に構えた

「では…始めましょ」

私は地を蹴り一気に長刀の射程から剣の射程まで間合いをつめようとするが…

「……」

彼女は足元を神速とも言える速さで廻いでくる

私は即座に軽く飛び、着地後すぐに後方に飛んで距離を取った

「速いですね…あの速さなら勢いに乗つて前に飛んでいたら一撃田を空中で食らうことになりましたね」

彼女は真剣な眼差しで「クリと頷いた。

その後、私はなんてか間合いをつめようとするとも全て神速の攻撃の前に後退を余儀なくされます

「仕方ありません、ならば…」

私はまたトウガイとの距離を詰める

当然トウガイは長刀を振るう、私は空高く舞い上がった

「！？」

彼女は直ぐに態勢を空中にいる私に合わせました…ですが

「避けて下さいよ」

ビュン！！

「…？」

私は剣を上空から彼女に向かつて投擲する

彼女は長刀でそれをはじきましたが

既に眼前には私がいます。

グッ！

空中で彼女の長刀の柄を掴み、着地すると、身構える彼女を無視して私は足をあげて長刀に力カトを落とします。

「…！」

しかし彼女は長刀を離すと一気に私に飛びかかりました

「チツ…！」

足を上げていたのが命取りになり、私は彼女に押し倒され、眼前に拳を置かれました。

「…フツ…この世界の女性は本当に強いですね。私の負けです、貴女の武…しかと見せて頂きましたよ」

「は……い！」

トウガイは私から退いて片膝をついた。

「トウガイ、南皮についたらあちらで兵の指揮も見せて頂きます。
まずは私の護衛兼補佐役として私に仕えて下さい」

「ハツ……！」

そして彼女は顔を上げて言つた

「朔夜です……」

彼女は深呼吸をする

「わたしの真名……」

「いいのですか？」

「は……い……」

「わかりました……朔夜。これからは私と共にこの乱世となるであろう世を歩みましよう」

「ハツ…！」

s.i.d.e 麗華

私は愁からトウガイさんの紹介を受けて彼女と会つた。大分緊張していたようだけど、とてもいい日をしていたわ。

将来エン家の支えになつてくれるといいわね…

「では麗華、私は南皮に向かいます」

その後に愁が南皮に旅立つ前に最後の挨拶に訪れた。

「ええ、南皮の事をお願ひね、愁」

「努力しましよう。では世が乱れたらまたお会いしましょう」

「ええ その時を待つてるわ」

「フツ…」

私は彼にいつも通りの笑顔を送り

愁は笑みをこぼしながら部屋を出た。

足音が遠ざかり、やがて聞こえなくなる

（良かつた…何事も無く送り出せた…）

私は安堵の息をついた…でも直後。

ズッグン…！

「…うつ…あつ…ー！」

ガタツ…！

私は胸の中心を手で抑えて机に頭をつける形で倒れ込む

「はあ…はあ…はあ…グッ…ー！」

胸が痛い…胸の痛みに連動して今度は体中が激痛に襲われる

「うあ…がつ…ー！」

しばらくして痛みは引き、私は全身に汗を書いて、荒い息をついていた

（…もう…私は…、せめて愁があの子達に道を示すまで…そして乱世が訪れるまで…）

「はあ…はあ…お願い…持つて…私の…体…」

誰もいない部屋で私は誰に言つても無く呟いた。

Hン姉妹と教育係（前書き）

やつと原作キャラが登場です。相変わらず面白い話ですがどうぞ。

Hン姉妹と教育係

数日後…私と朔夜達家族、数百名の護衛は無事南皮へとたどり着いた。

そのまま街の中を視察しながら進み、南皮の宮中にたどり着く。

そして兵士に案内され、私と朔夜は謁見の間に通されました

その一つの玉座に座つているのは金髪の立てロールを四本にも分けて娘と、まだ子供な金髪を腰まで伸ばした娘だった

周りにはエン家の主要人物と思われる者達が控えている。

私はそのまま玉座の下まで来ると歩みを止めた。

「お初お目にかかります。伝令から報告は受けているしやるとは存じますが…私は洛陽にてエン伶の補佐役を勤めます愁と申します。こちらに控えるのは私個人の副官でトウガイと申します。以後お見知り置きを」

朔夜が片膝をついて礼をする

私はしませんけどね

金髪縦ロールの方が少し眉を潜める

「わたくしはエン家の次期当主継承権一位のエン紹ですわ。」こちら
のはわたくしの腹違いの妹でエン術です。麗華おば様の補佐役でし
たわね？…その補佐役がどうして南皮にいらっしゃるんですか？何
かございまして？」

鬱陶しそうな顔で愁を見るエン紹

「フッ…私は麗華の頼みでエン紹殿、並びにエン術殿に様々な事を
教えるために来たのです」

先程の挨拶とは一転してふてぶてしい態度をとる

「なつ…貴方おば様の真名を！…」

エン紹が玉座から立ち上がりつて場が一気に殺氣立つ

「お主…麗華おば様から真名を許されておるのか！？」

エン術は殺氣こそ放つていながら驚きに満ちた表情をしている

「ええ…私は麗華から真名を許されています、例え姪のエン紹殿に
も口を挟まれる筋合にはありませんよ」

「うう…ま、まあいいですわ。それにしても教育ですって？わたく
しには既に力ク図、美羽さん…エン術には張勲がその任についてい
ますわ」

「フッ…ならばまず私が貴女達の能力を試験します。それが私を納

得させられた結果ならば教育普通の教育はその者達にお任せしますよ」「う

「いいですわ！－」のわ・た・く・し・の実力を思い知つて洛陽に帰るといいですわ－！」

彼女が挑戦を受諾した時に頭をかかえる文官が一名、あれが力ク図ですか。麗華の話ではエン家への忠誠心は高く、頭もそこそこキレイものの出世欲が強く、兄に何回か同僚の讒言をしてくるとか…

完全に熱くなつてゐるエン紹に対しても「うーむ…試験のう…」

などと一人ごちている

「エン術殿、何か問題が？」

「いやのう…わらわの教育係といつても…まだわらわと張勲は出あつて4田じか立つておらぬのじゃ」

「そうですか…ならば前任者から学んだ」とを…」

「いやそれが…」

私の言葉を遮りエン術は少し困った顔をする。

「わらわは読み書き以外習つた事がないぞ」

……予想外。

「名門の娘だから3歳から教育ははじまっているものだと想つていましたが…一体麗華の兄は何を考えているのでしょうか。」

「わかりました、エン術殿の教育係の張勲を後で私の部屋に来させて下さい。それから考えます」

「わたくしはどうするんですの?..」

エン紹が首を傾げる

「試験まで七日」とえます。今までエン紹殿が学んだ事を今一度復習しておくんですね」

「フン、わたくしにそんなもの必要ありませんわ!…全く無礼な男です」こと…カク図、行きますわよ」

エン紹はカク図を連れて謁見の間を出て行ってしまった

「…姉上は相変わらず怒りっぽいの…あつそづじや、誰か伝令についた愁の部屋とトウガイの家族の部屋に案内してやるがよいだ」

「はつ」

一人の将校っぽいのがエン術に礼をして、一歩一歩下りてくる

「では、ひづれじつわ」

「案内痛みります、朔夜、行きますよ」

「クッ

「ではエン術殿、張勲殿の件は宜しく頼みます」

「ちやんと伝えてくわ ではわらわも部屋に帰るとするかのう

少し眠そうにしながらHン術も我々とは別方向から出ていった。

…Hン紹殿には苦労せられそうですが、Hン術殿はまだ自分が固まっているように感じます…上手く導ければよいのですが…

そんな事を考えながら歩っこないと部屋にこたらし

「では朔夜、明日から宜しくお願こします」

「は…い…」

私と朔夜の家族の部屋は隣同士らしい。

とは言え私の部屋は他の部屋とは独立してこるようですが。

朔夜と別れ部屋に入る

部屋はかなり広く、端には寝台、寝台と逆側の中央奥には机、更に横壁には書庫など揃っていた。

執務室も兼ねているようですね、これは楽でいい。

洛陽から持つて来た書物を書庫に収めて行つてみると…

「あの…張勲です、エン術様からお話をあるとお伺いしたんですけど…」

随分と間延びした声だがやや緊張してゐる雰囲氣がある

「ええ、入つて下さい」

「失礼します」

入つて來たのは紫色の髪を結い、白を基本とした服を來てゐる少女
だった

随分若いのでちよつと驚きましたが

「聞いているとは思いますが、当代エン令殿の依頼で来ました愁です。以後お見知り置きを」

「はい…えっと、それで何の用ですか？」

張勲は呼び出された理由がよくわかつていないうです

「貴女はエン術殿の教育係を勤めはじめたらしいですね？」

「はい、試験に合格して正式に任命されました」

「…すみませんが少し教育係の任につくのを待つていて頂けませんか？」

その言葉に明らかに動搖した張勲

「え？ ど、どうですか？」

泣きそうな顔をする張勲。

少し可哀想な気もしますが仕方ありません

「私はエン怜の依頼でエン紹、エン術双方に意識改革を施さねばいけません。」

「意識改革？」

「ええ、エン紹は今見た限りではプライドばかり先走っている暗君に、エン術はただの子供…といった風に見受けられます」

「エン術様はまだ12歳です、仕方無いと思いますけど…」

張勲が至極もつともな意見を語り、一般的には…ですが。

「彼女達は諸侯の中でも最大の力を持つエン家の跡取りです。洛陽にいるエン怜にもしものことがあれば、当然彼女達がエン家を指揮

する事になるわけですが…」

私は彼女をしつかり見つめながら言葉を続ける

「その時彼女達が今の調子では、エン家は生き残ることは出来ません。

更に言えればこれから訪れる乱世において、エン家が敗北するような事があれば、戦は泥沼化して苦しむのは国民です。

世が乱れた時、最大勢力の我等エン家が善政を敷き、国を統一するのが平和への近道…恐らくエン伶はそう考へてゐるはずです。

そのためにはまず彼女達が今、時代にどれだけ求められているかを教えねばなりません。

ですから張勲、貴女はしばらく兵法を更に収めるなどしておいて下さい。

彼女達に君主たる心構えが出来た時、張勲、貴女はエン術殿の教育係兼補佐官を勤めて頂きます。

少し長い話でしたが彼女は私の目から一切視線をそらさなかつた。

張勲は少し息を吐くといい笑顔を見せた

「あ～あ…カク団様があんな人だから私も教育係になれば、エン術様の元で絶対な権力を持つてると思つたんですけどね～」

彼女は一旦後ろを向く

「エン術様つて可愛いでしょ？私、あの笑顔が大好きなんです。だからあの笑顔を一番近くで見られるように頑張つて勉強して教育係の試験に合格したんです。

でも……そつか、やっぱつせは乱れたりやいますか」

そしてまたこねりに向き直る

「わかりました、権力欲は捨てて、エン術様のために私は今しづらく乱世に備えて勉学に励みます。ですがお願いがあります」

「…なんですか？」

「エン術様の笑顔を消してしまつような教育だけはなさらないで下さいね。

あの笑顔は私が一番欲しい宝物なんですからー！」

「…善処しまじょつ

「善処があ…まあいいです。では私は戻ります。『J用があればまた呼んで下さい』

そうこうしてすぐに頭を下げる出でていった。

張勲はエン術の事を大切に思つてゐるようですね。それにしても…

「普通権力を欲していたなどとは私を前にして言いませんよ」

まあ諦めたから許してという意味もあるのでしょうか…なかなか面白い人ですね。

さて…まずは明日、エン術の方から指導を開始しますか。

ある程度考えていた指導方を頭の中で整理しながら書物の整理を再開した。

エン姊妹と教育係（後書き）

シユウが主人公だからなかなかギャグを入れれないのが悩みです…
それでわ。

Hン家改革… Hン術編（前書き）

ちょつとじいの展開をせむか悩んでたらいつの間にか一月たつてしま
た…（汗）

相変わらずの駄文ですがどうぞ

次の日…私は朔夜と共にまずHン伶の兄を訪ねた

皆と同じく金髪のなかなか美形な中年である

「お初にお目にかかります、私は洛陽にて麗華様の補佐を勤めてい
る愁と申します、」じきに控えるのは我が副官のトウガイです。」

「ふむ、して用件はなんじゃ？」

「いえ、先日は太守様に田通りが叶いませんでしたのでご挨拶を…」

「ああ、さようか。麗華からの手紙では君がいかななる事をしても手
出しそうのことないよう書いてある。報告も必要ない、好きにして
くれ」

さして興味も無さうに手をシッシとふる。

「…はつ。では失礼します」

私と朔夜は部屋を出てHン術の所に向かつた

「…あれでは麗華も苦労するでしょうね

つい独りじりてしまひ。

「……で、でも……これで……愁様が……動きやすく……なりま……した……」

「そうですね、あの男に邪魔をされる」とはないでしょ、後はエン術、エン紹に灸を据えればいいだけです」

「……愁様、顔が……楽し……そつ……」

「フツ……」

しばらくしてエン術の部屋に着いた。

部屋に入るとエン術が長椅子の上で寝つじろがっていた。

「おお……よってきたの。じて何をするのじや？」

「エン術殿にはまず民に関する考え方をお聞かせ願いたいと」

「民？民などにこちこち頭を使つたり氣を使わねばならぬのか？父上も姉上もそんなことしておらぬぞ？」

「ならば貴女個人にとつて民とは？」

「ふむ？わらわ達に従つて生きるものでは無いのか？」

本当にわからないと言つた様子で答えるエヌ術

「…なるほど、では最近民は飢えに苦しみ、飢えを凌ぐために賊となつて更に弱い民から食料を奪い殺すような事態になつています。勿論南皮は麗華の政策でマシな方ですが…このことについては?」

「と聞われても…飢えとはなんじや?」

…以外と重症だつた。本当に世間の事や常識を知らないよつだ。

「…そりですか、では体験して頂きましょ?」

「なぬ?」

私は笑顔で言つた

「これから一田間、水以外は『えません。部屋から出ぬ』とも禁止します。以上です」

「うわー…それさびつけ」

バタン!!

私とトウガイは部屋を出た。そして控えていた洛陽から連れて来た兵数人に部屋を固めさせてその場を後にした。

「愁様…やり方が…強引…」

朔夜は後ろを振り返りながら心配そうな表情を見せる

「飢えを経験した事が無いエン術に一日間は辛いかも知れませんね」

それにエン術はまだ幼い。だから本当は3日所を2日にしたのですが…

「…それに…あのやり方だと…愁様に…恨みを…持つ…可能性…が…」

朔夜は腕を組み、顎に人差し指の関節を当てて考えている

確かに朔夜の言つ事はもつともなのだ。

ここでエン術の恨みを買えば、後々厄介な事になる。最悪エン術を追放しなければならなくなるかも知れない

「…この荒療治が成功しなかつたらエン術殿に後々実権が行かないようになります。問題を起こせば追放です。出来れば避けたい所ですが」

「…はい」

そして、エン紹や家臣達の抗議もどこ吹く風とかわしつつ、一日が過ぎた。

私は朔夜を伴い、胃に優しい食事を持つてエン術の部屋に向かった

ガチャ…

扉を開けるとエン術はベットの上で横向きに体を丸めてグッタリしていた。顔が青く、ハア、ハアとか細い息を吐いていた

ベットの近くに壺があり、そこから異臭が漂っている

恐らく胃液を吐いたのだろう

エン術はこちらこちらづき、私の手にある食事を皿にする

「あ…食事…食べさせてたも…」

私達はベットに行き、私はエン術の体を起こしてやり、朔夜が食事をゆっくりと食べさせた。

ほどなくして食事を終えてエン術は寝てしまった。

私達はエン術が起きるのを部屋で待ち続けた。

「う…ん…」

エン術は三時間後に目を覚ました

顔色も少しづくなり自分で起き上がった。

「さて、エン術殿。飢えというのがどうこうものか多少は理解でき

ましたか?」

「一度とあんなのは」「めでじや……酷いのじや愁……」

「どうが民が苦しんでこないと理解できたでしょ」「…」

「…民は毎日あんな思ひをしあるのか?」

「…民は悲しそうな顔をいたりむかわる

「洛陽、南皮においては少しもで酷い」とはなつてこません。ですが、Hン家の息が及ばない場所では食べる物に困る地域も多々あります。」

「…可哀想にの」

「Hン術殿、もし貴女がHン家ではなく只の民として生まれていたら、こういつぱい命ついていたのは貴女だったかも知れません」

「…生まれる家は選べないからの…」

「そうです、生まれた時から既に苦しみでしまつとな生の中なのですよ」

「…民を助けなければならぬ…麗華おばあさまの政治を中華に伝めて食えなど無くさねばならぬの…」

キツと田に決意を宿らせたエン術、想像以上に効果があつたようですね。

「その通りです。そして万が一麗華に何かあつた場合、麗華の政治を受け継ぐのは貴女やエン紹殿になります。」

「わかつたのじや、わらわはこれから勉学に励むのじや……麗華おばさまを目標にして様々な事を覚えて行くのじや……」

「フッ……結構。では張勲と共に勉学に励んで下さいね。」

そして陶器に入れた一杯の水を差し出す

「一日間耐えた」褒美です、貴女は蜂蜜水が好きだと聞いたのでね

そう言ひてエン術に蜂蜜水を渡した

「んぐつ……んぐつ……」

エン術は一気飲みをした後にパアッと顔を輝かせた

「つまい……なんじや」の蜂蜜水は…？」

「貴女がいつも飲んでいる蜂蜜水とは蜂の種類が違うのだと思います。商人がこれは貴重だと言つていたのでね」

エン術は陶器を握りしめ何かを考えていた

「…」んなおいしい蜂蜜水を皆が飲める時がくるとこいのう

「それを実現できるかは貴女次第ですよ。」

「うむ…やる気がしてきたのじやーー！」

「フツ…では私達はこれで」

部屋を出て行こうとする私にエン術は声をかけた

「愁ーー！ありがとうなのじやーー！わらわはこの大陸から必ず飢えを無くして見せよつぞーー！」

私はエン術に笑顔を向けて立ち去った。

「良…かつた…ですね」

朔夜が歩きながら笑みを浮かべてこちらに話しかけて来た。

「ええ…想像以上に効果がありました。彼女はまだ心に色がついていない状態だったのでしょう。これからは私達が彼女を良き方向に導いて行けばいいのです…貴女も頼みましたよ、朔夜」

「は…いー」

さて、問題はエン紹殿ですね。

出来れば現時点で強大な勢力であるエン家を一枚岩にするためにも
彼女にも志を持つていただきたいのですが…ね。

そんなことを考えながら私達は執務室に戻った

Hン家改革…Hン術編（後書き）

エン紹…どうするかまだ決めかねてます（汗）

感想受け付けを全体に修正しました。

Hン家改革… Hン紹編（前書き）

やつとできた…

まあグダグダ、やつつけ感満載ですが（汗）

Hン家改革……Hン紹編

s.i.d.e 朔夜

「……」れは……

愁様は田の前にあるエン紹に出した主君として必要な事などを質問した紙を見て愕然としていた

郭図殿はそんな愁を見て顔から滝のように汗を流しています

それはそうですね……

戦に勝つにはまず何をすればいいか？

【全兵力を持って華麗に前進すればよろしくですわ】

民に安寧をもたらすにはいかよつな政治を行ひべきがあなたの思想を教えて下せ。」

【Hン家の民となつたからには何も案ずることなどありませんわ。後は大陸をHン家が統一するだけですわ】

などなど

何を質問しても華麗とかなんとかで具体的な解答は得られない始末です。

エン紹様本人を下がらせた愁様は教育係の郭図殿に視線を向けました

「郭図殿？現在漢で最も力を持つエン家の跡取り候補に一体何を教えて来たのですか？」

「うう…わ…わしは麗華様に不快な思いをさせぬよついしてきただけじゃ…！」

「つまり教育係とは名ばかりというわけですね？失望しましたよ郭図殿…あなたをエン紹殿の教育係から外します。異論はありませんね？」

「クッ…」

「では下がつていいですよ」

郭図殿は愁様を一別して部屋を後にした。

「愁様…郭図殿は…エン紹様を…跡継ぎになつた後に…いよいよここ操るつもつだつたのでは…」

「恐らくそうでしょうね。全信頼を受けてエン家を思つがままにしてみつとしたのでしょ？」

「…あのまま生かして…おくのですか？」

「問題があれば排除するだけです。それより今はエン紹をなんとか

しなければなりません

「…どうおつもり…ですか？」

「まずはエント術にしたように民がどんな思いでいるか理解し、民を慈しむ心を育てなければならぬでしょうね」

「…愁様…恐れながら…エント紹様は…生半可な事では…変わらないと思います…」

「…また強引な方法になりますが…朔夜、すみませんが今夜エント紹殿にお越しいただけるように言付けをお願いします。」

「はっ…」

夜：私はエント紹様を伴つて地下牢に来た。

地下牢の入り口には数人の看守がいて警備は万全のようだ。

看守が言うには愁様は地下牢のかなり奥の方にある重犯罪を犯した者達がいる凶画にいるらしい

「…薄意味悪い所ですわね…」

エント紹様はこの雰囲気が苦手のようで顔をひきつらせている

私はエント紹様の手を引きながら奥へ進んで行った

しばらく進むと薄暗い光の先に愁様が椅子に腰掛けで待っていた。

愁様が言うにはこれだけ長い距離があるのは脱走などが起きた時に地下牢出口を封鎖する時間を稼ぐためだとか。

愁様は看守から預かつた鍵を使い牢の一つに入った。

そこには手枷足枷をつけられた囚人がいた。

「さてエン紹殿……ここにいるのは南皮の大勢民を殺めた賊です」

愁様の言葉に自國の民を大勢殺されたと知ったエン紹様は怒りを露わにする

「許せませんわ……愁さん……処刑してしまいなさい……！」

胸を張つて愁様に申しつけるエン紹様：ですが…

「いえ、エン紹殿。罪人の処刑は貴女がするのです」

「なつ……こんな下銭な輩にわたくしの手を汚せと言っています！？」

のけぞりながら焦った様子で抗議するエン紹様、ですが愁様は涼しい顔で答えた。

「はい、その通りです。では剣をお持ち下さい」

愁は剣をエン紹様に渡します

エン紹様は渋々剣を取り、罪人に向けて構えます

「さあ相手は我が国の民を殺した罪人です。エン紹殿、お裁きを」

「うう……」

エン紹様の剣を持つ手が震えています……ああなるほど、エン紹様は……

「どうしました？ああ、エン紹殿はまだ初陣をしていませんでしたね？ならばまだ人を殺めたことがないのですね」

「そ、そうですわ！－わたくしが最初に人を殺めるなら華麗な初陣と決まっていますわ！－まったく愁さんも気が効きませんこと！－」

自分が殺さなくて済む流れにほつとした様子のエン紹様。

「ではエン紹殿、剣を私に」

「ええ、まかせますわ」

エン紹様から剣を受けとった愁は剣を無造作に振り上げる

「フツ……流石に賊の大将だつただけに肝は座つてゐるようですね……ですが……」

愁様は剣を肩に振り下ろした

スブシユー！！

「グッ…！」

賊が苦悶の表情を浮かべて一気に汗が吹き出る

「貴方の配下は夫の目の前で妻を陵辱しながら、夫が死に至らぬよう加減しながら殺したそうですね」

「グッ…」

剣を肩から引き上げ、また無造作に剣を振る

スバツ！！

「ぐあああーー！」

今度は太ももに剣が振りおろされた。但し剣は骨で止まり、おびただしい量の血が流れるだけで賊はまだ生きている。

「うつ…」

エン紹様はその光景を見て吐き気を催したのか、口に手を当てている

「エン紹殿、目をそらさないで下さいね？賊に襲われた民がどういう死にするのか…今、彼を使って貴女に見せているのですからね」

愁様は薄く笑みを浮かべて剣を太ももから離した。

「さて……衛兵……」

「はっ……！」

愁様の呼びかけに答えて現れた衛兵は一人の美女を連れていた。

「なつ……！」

賊が驚愕した声を上げる

「あ……あんた……！」

女も賊を見て涙を流した

「さて、残念ですがあなたが逃がしたあなたの女もこの通り、エン家の兵が捕らえましたよ」

「な……あいつに向をするつもりだ……！」

「さて？あなたがたは先ほど言ったように夫の前で妻を陵辱したそうですが…私にそんな趣味はありませんからね。」

そういうつて女の前に移動する愁様

「あなたの部下の証言によれば最初はあなたが攫つて来た娘だったそうですね？ですが後にあなたの女になつたとか…」

そういうつて愁様は視線を女に移す

「最初はあなたも彼に何もかも奪われた被害者だつたそうですが…彼の女になることにより、哀れな末路から逃れられたそうですね…ここまでなら同情できるのですが…」

愁様は言葉を続ける

「あなたはこの賊に自分の村に救援を送らなかつた裕福な村を襲わせたそうですね。」

「そ…それは…」

女の顔が引きつる

「確かに援軍を派遣しなかつた裕福な村を恨む気持ちはわかりますが…そんな事を頼んだ時点であなたにはもはや同情の余地はありません。あなたの願いにより多くの命が亡くなつたのですからね…」

「うつ…じゃああたしの恨みはどうしたら良かつたのさ…！…あたしはただ平穀に暮らしていければそれで良かつたのに…彼の配下の独断で村が襲われて…救援を求めたけど誰も助けてくれずにみんな死んじまつて…あたしはその配下に献上品として彼に…あたしは生きるために彼の女になつた…後で聞いて見たらあの村は大金を払つて自分達の村を見逃してもらつて代わりにあたし達の村が彼の配下に

襲われたって言つじやないのさ…だから彼に頼んでそんなふざけた理由であたし達の村を襲つた彼の配下を殺してもらつてあの村も襲つてもらつたのさー…」「

深い闇を瞳に写して女は叫んだ

その話を聞いていたエン紹様は何も言葉を発することが出来なかつた今までには下々の者達など氣にも止めなかつたが、こうして田の前で、感情剥き出しにしている女を見てはとても自分には関係無いという気分にはなれないのでしょうか

「さうですね…その裕福な村には僅ながら駐屯兵もいたと聞きます。これは彼の部下やその村だけでなく、エン家の落ち度でもあるでしょう…」

エン家の落ち度と聞いた瞬間にエン紹様がピクリと肩を震わせる…そしてそのままつむいてしまつた

「…残念ですがあなた達の死刑執行田は今田です。一つの村を壊滅させた要因を作つた女に、弱き者から略奪を繰り返した賊の頭領よ…せりばです」

そういつて愁様は先ほどとは違い、田にも止まらぬ速さで剣を一閃した

プシュウ～…

その瞬間に女は首から上が無くなり、体が崩れ落ちた。

首から上だけになつた顔は涙と絶壁にそまつていた…

「沙奈……」

頭領がおそらく女の真名を叫ぶ。

しかしその瞬間…

愁様の一閃が男の命を奪つた。

地下牢を出てエン紹様の部屋へ着いた。

エン紹は長椅子の隅にもたれ掛かる形で腰を下ろし、愁様と私はその対面の長椅子に腰掛けた。

「…愁さん?」

「なんじょうか?」

「貴方は…恐ろしい人ですね…」

「…わて、どうじょうね?」

「理屈はわかりますわ。あの女がしたことによつて更に多くの命が失われたと。でも殺してしまつ」とは…」

「Hン紹殿、あの女の話に出てきた村人は全滅した訳ではありません。まだ生き残りも大勢います。そんな中、自分達の村を襲わせた女が生きている」とをどう思いますか？」

「でも…元はと言えばあの村が賊と取引したのが「全員が取引に参加したとお思いですか?」うつ…」

「エン紹殿、恨みは恨みを呼びます。負の連鎖を断ち切るにはどちらかを成敗しなければ禍根が残るのです。ですが我々には別に出来る事があるはずです」

「…民を富ませ、賊など出ないような世の中にする…といつことですわね」

「その通りです。今回貴女がその事に気付いただけ中華の民にとって大きな収穫になるでしょう」

「…何故ですか?」

「Hン家は現在中華最強の勢力を誇ります。その時期当主が己の役割を見いだしたのです。これからはHン家が支配する国は少しづつ民が平和に、豊かに暮らせる国になつて行くはずです。今貴女が言った民を富ませ、世を平和にするとの言葉に偽りがなければ…ね」

「偽りなどありませんわ!! わたくしの田の届く場所では二度となる話のような事は起こさせませんわ!!」

「フッ…ならば結構。これからしばらくなHン術様と共に良き時期

当主となるべく勉学に励んで頂きましょ」

「… 美羽さんも時期当主に？何故ですか？」

「フツ… それはまだ秘密です。ではエン紹殿、今日明日はゆっくり心と体を休めて下さいね。朔夜、行きますよ」

「… はい」

愁様とも別れて私は自分の部屋の寝床で畳を空けていた

愁様は確かに恐ろしいことや、相手に苦痛を与えることを平氣で実行する冷徹な所がある

けど私は愁様の優しさを知っている。

洛陽で娼婦だつた私を拾ってくれたことは一生忘れない…

私は… 愁様が例えどんなに残酷な策略を用いても私は愁様について行く。

例え私が実行することになつても必ずやり遂げてみせる

それが中華に平和をもたらす一番の近道と信じて。

愁様：お休みなさい。

私は決意を固めて目を閉じた

Hン家改革…Hン紹編（後書き）

麗羽がこのへりここで改心するかどうか微妙なところですが、それは原作破壊ということでもうめに見て頂けると助かります（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6439o/>

シュウ・シラカワ、外史に降り立つ

2010年12月28日10時47分発行